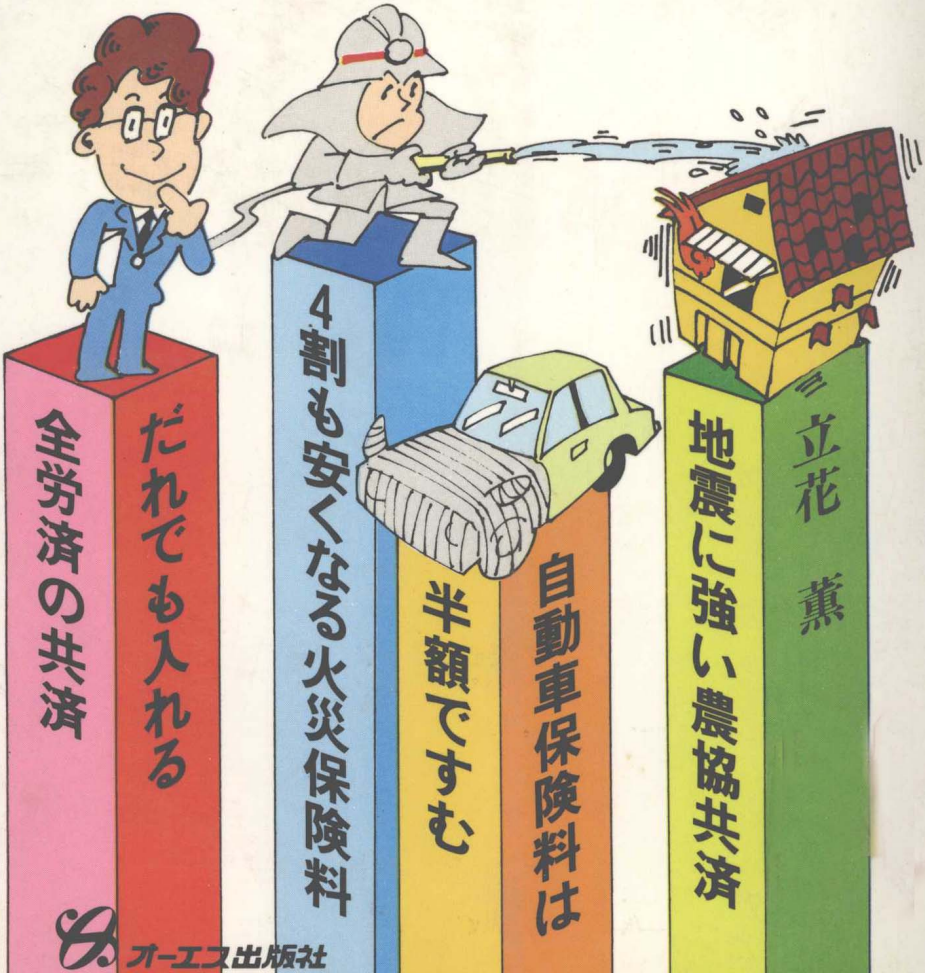
TODAY BOOKS

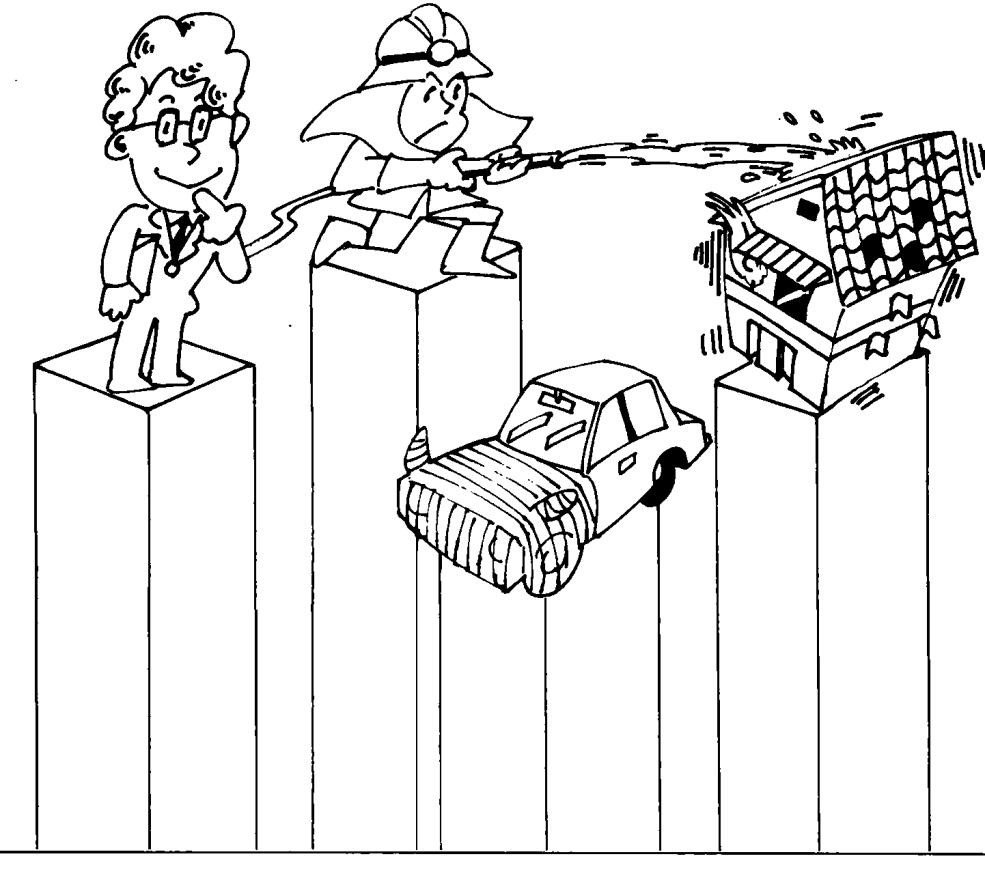
大損しない損害保険選び



立花 薫

オーエス出版社

大損しない
損害保険選び



オーエス出版社

立花　薫（たちばな・かおる）
1932年，埼玉県浦和市に生まれる。
1954年，法政大学社会学部卒業。
1977年，「協同組合保険を推める会」
を結成し代表幹事となる。
東京都中野区大和町在住。

大損しない損害保険選び　定価 980円

著　者　立花　薫
©K. Tachibana 1980
発行者　小山　幸男
発行所　オーエス出版株式会社
〒101　東京都千代田区神田錦町3—15　昭栄第2錦町ビル
Tel.03（295）1658　　振替　東京1—29178

印刷・東京ベル印刷株式会社　　製本・田中製本印刷株式会社
0000—20010—0819
（落丁，乱丁はお取り替え致します）

まえがき

主婦連合会の全国消費者団体連合会の手によって、「保険」が告発されたのは、もう一〇年も前のことであろうか。いらい、「保険」はそのベールをはがされ、コンシューマリズムの大きな標的にされた。このため、生命保険業界は「生命保険文化センター」を設立するなど、消費者批判に応える努力をみせたが、一方、損害保険業界は、商品の多様化などもあって依然、旧体質のままである。「保険」は大蔵省の行政監督下にあり、これが〝隠れミノ〟になっている感じだが、生命保険に関しては、大蔵省も外資生保の参入などで温床行政の囲いを取り払った。

しかし、損害保険に関しては、国民のニーズが大きな広がりをみせているにもかかわらず、さほどの変革をみていない。損害保険業界は「福祉産業」の看板を掲げながら、消費者理解を求める努力もせず、安穏な経営姿勢に終始している。したがって国民大衆の間には、自動車保険（任意）、火災保険、地震保険、その他の傷害保険など三〇〇種類にもおよぶ保険料が果た

して適正なのか、どうか——多くの疑問点がわだかまっている。

さらに、国民の間には「どの損害保険会社も一様一律な保険料だが、もっと安い保険料で同程度の保障がされる商品はないのか」という要望も高まっている。物価上昇のピッチが速まり、賃金上昇率を上回るペースとなった昨今では、なおさら大衆の〝安い保険料〟を求める気持ちは強いのである。

この時、筆者は貴重な助言者を得た。それは、コンシューマリズムに保険問題が登場する前から同様の考えで運動を続け、一方で、事業的にも助け合いを実践してきた全国農業協同組合と全国労働者共済生活協同組合の共済担当者たちだった。この二つの協同組合の持つ長い歴史の中で、生活する人への思いやりがいっぱいつまった、助け合いを目的とした素晴しい制度が築き上げられていたのである。それを知った時、この協同組合の「共済」という〝保険会社〟の「保険」に変わりうるものの存在を働くすべての人たちに知らせずにはおれないという思いにとらわれた。

ふつう一般の人たちは「共済」といえば、特定の労働組合員か農協組合員でなければ加入できないと思っている。しかし実際には、そうではなく、全労災の共済などは、会員になりさえすれば一般サラリーマンや主婦が自由に加入できるという。それでいて、たとえば自動車保険の保険料は損害保険会社の保険の半分ですむし、火災保険も四〇%ぐらい安い。「こういう保

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

障制度が広くPRされないのは、むしろ社会の不公平である」とさえ思ったほどだ。

このため本書はこれまでのように、保険の仕組みや注意を伝えるにとどまらず読者の生活を変えるほどに具体的な選択を迫るものとした。さらに、今まで〝むずかしい〟と避けてきた保険の長所、短所を理解できるようにするのはもちろんのこと、そのことが今日まで保険を放置してきたことへの責任をも明確にした。

何といっても、第一義的な責任は保険会社にあるが、知らなかった利用者にも責任はある。そこで本書では、〝むずかしい〟ことを避けることなく、わかりやすく事例をひきながら、とくに〝いざ〟という時に大損をしない方法について、具体的に商品を比較し、違いを明示した。

さらに、サラリーマンをはじめとする読者に、保険知識と具体的な利用方法や商品を紹介し、家計にもメスを入れた。なかでも、もっとも読者が知りたがっていることを問答形式で十分に説明したつもりである。また〝家計の中の保険料〟をいろいろな家族形態の典型例から診断してみた。

サラリーマンをはじめ働く人たちにとって、生活から切りはなせない保険を〝売る〟立場からではなく、保険の利用を求める立場から執筆したつもりだ。

本書の発行によって、協同組合の共済を担当する人たちが自分の仕事に強い確信を持ち、一

方、損害保険会社の関係者たちが、今一度、販売商品の問い直しに努力することになれば、望外の幸せである。

一九八〇年一一月

著　者

目次

まえがき

第一章　損害保険をもっとよく知ろう

1　もうけすぎと批判浴びる損害保険――14

■大蔵省も加入者へ利益還元を求める　■あなたは年収の一〇%を保険料として支出している

2　損害保険の販売のされ方――18

■海上、火災保険が草わけ　■革命児・長期総合保険

■協同組合保険の素顔　■農民の共済（全共連）

■労働者の共済（全労済）　■漁民の共済（全水共）

■損害保険の普及率はどこまできているか

3　損害保険にはどんなものがあるか――28
A 火災・住宅保険――28
■新種の保険が続々登場　■革命的な価格協定保険
■協同組合の火災保険　■お寒い地震保険の現状
■宮城県沖地震で見直された協同組合の地震共済
B クルマの保険――34
■自動車損害賠償責任保険　■自賠責共済のメリット
■任意の自動車保険　■五〇%も掛金が安い全労済の自動車共済
C 傷害保険――40
■スポーツ、旅行のケガも保険で保障　■各種傷害保険の紹介
4　損害保険の仕組みに強くなろう――42
■保険用語を知らないと大損する　■保険料の納めす

ぎは少ししか戻されない　■八〇%の損害を受ければ全焼とみてくれる　■協同組合の火災共済なら同じ家を「再建」できる

5　保険料はどのように設定されるか――50

■保険の良し悪しは保険料で見ぬける　■保険料は電気代と同じ　■あなたの「家」の火災保険料は　■火災保険料は場所と家の構造で決まる　■農協火災共済の「まもり〇型」の掛金は格安だ　■全国一律で一〇万円当たり木造一〇〇円、鉄筋六〇円の全労済の火災共済

6　こんなに違う募集方法――65

■保険は代理店システムで売られている　■大きい代理店の取り分　■協同組合の共済は一般の人も加入できる　■全労済の火災共済はだれでも一〇〇円で加入がOK　■市民に開かれた労済共済会の窓口と推進員

制度　▩数字と文字で見る比較　▩数字は何を教えるか　▩数字で見る自動車保険　▩急増する女性のバイク事故　▩バイク保険料も全労済は六〇%安い

第二章　効率のよい損害保険選び

1　目で見る保険の効果――86
▩大損しないために　▩"おそまつな"保険なのに保険料はなぜ高い

2　いざという時にいくらもらえるか――88
▩銀行に行ってしまう保険金　▩恐ろしいローン地獄
▩住宅の評価は年々目減りする　▩価格協定は効果的といわれるが……　▩価格協定保険も加入の仕方を間違えば大損となる　▩総合保険にも弱点がある

3　自動車事故、地震から生活を守るチエ――103
▩あなたは三重苦に追いやられる　▩対人損害賠償は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

おどろくほど高額が要求される　▩今の地震保険はお見舞金しか出ない　▩時価いっぱいにかけないと損をする団地保険　▩うっかりしているともらえない保険金　▩自動車保険は六〇日間で無効になる

4　税金で損をしないチエ――117

▩保険と結びついている税金　▩所得控除は最高三〇〇〇円まで　▩火災保険の保険金は非課税　▩罹災の時は課税が減免される　▩家を立て直したら▩所得税額からの住宅取得控除　▩満期金は一時所得▩受け取り人で変わる税金

第三章　損害保険を上手に契約するコツ

1　代理店の説明に耳を傾ける時代は終わった――132

▩アフター・サービスも充実してきた共済　▩損害保険加入の際は何社も当たってみよう　▩加入の目的を

ハッキリさせる　■保険の制度は数字の組み合わせ　■損保二〇社の保険商品はみな同じもの　■住まいの保険は総合化の傾向にある　■庶民の守り神、全労済の共済　■損害保険加入のための虎の巻

2　実際の契約の仕方QアンドA ―― 143

■自動車保険QアンドA　■火災保険QアンドA

第四章　暮らしの中の損害保険相談室

1　生活保障設計への家計簿診断 ―― 168

■全部の保障を全労済の共済に求めたい　■人に貸している家にも火災保険をかけておく　■体の弱い夫を持った家庭と保険　■自動車保険には必ず加入することが大切　■三人の子供を大学に進学させたいが……　■保険料は収入の一〇%をメドとする　■転職者は年金の調査をしてから民間の保険に加入すること　■地

震には農協共済の「建更」を

第五章　低い負担、高い保障の損害保険を考える

1　真に必要な保険（共済）とは何か――188

■保険会社は「福祉産業」か　■損保各社は「共済の保険料の安さ」に挑戦してほしい

2　協同組合保険に提言する――191

■今や協同組合間の力を結集する時　■軽微な損害でも給付できるように

3　保険という「商品」の売られ方に注文する――195

■簡単でわかりやすい規約、説明文が求められている

■活力の源泉は組合員のバイタリティだ

巻末資料

●カバーデザイン／浅賀憲治

●本文イラスト／木村章一

第一章

損害保険をもっと
よく知ろう

1　もうけすぎと批判浴びる損害保険

■大蔵省も加入者へ利益還元を求める

あなたが今、かけている損害保険の保険料はどう考えても高い。これは「保障を万全にするために必要だ」という理由で損害保険業界が内部留保につとめているからである。

保険は「保障」が完璧でなければ意味がないから、損害保険各社の「体質強化」も必要なことはよくわかる。しかし、それにしてもあまりに〝安全率〟を求めすぎてはいないか。損害保険業界の総資産は昭和三十年度末には、九七〇億円だったが、五十三年度末には、五兆七〇〇〇億円へと急膨張している。

マスコミも「損害保険会社はもうけすぎとの批判は各方面から上がっており、大蔵省も保護行政を転換せざるをえなくなった」と伝えている。

〝保険のもうけすぎ論〟は、かつての生命保険にもみられたが、生命保険業界は、そのつど、保険料率を引き下げたり、消費者PRに努めるなど批判に応えた。損害保険業界も料率引き下げはしてきたが、生命保険のカゲに隠れ、大蔵省の手厚い保護行政の温室暮らしを続けている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com